東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

我が国のダウン症児の言語研究における今後の課題：文法的形態素に視点を当てた研究の必要性

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2012-06-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 安宅,涼香, 伊藤,友彦
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/127946

東京学芸大学紀要　総合教育科学系Ⅱ　**63**: 133－137，2012.

我が国のダウン症児の言語研究における今後の課題

―― 文法的形態素に視点を当てた研究の必要性 ――

安　宅　涼　香*・伊　藤　友　彦**

特別支援科学講座

（2011年9月28日受理）

1．はじめに

文法的形態素の獲得は，従来から主として特異的言語発達障害（Specific Language Impairment: SLI）児で問題とされてきた。近年では，ダウン症児も時制辞などの文法的形態素の獲得に問題をもつことが明らかになりつつある（Stathopoulou & Clahsen, 2010）[1]。

一方，健常児の言語獲得に関する研究においても，時制辞などの機能範疇が重要な役割を果たしているといわれている（Radford, 1990）[2]。また，英語圏などでは健常児も時制辞などを省略する時期があり，OI（Optional Infinitive）段階とされている（Wexler, 1994）[3]。この段階に関するEOI（Extended Optional Infinitive）仮説はSLI児の文法的形態素の問題を説明するために提案され（Rice, Wexler, & Cleave, 1995）[4]，SLI児のみならずダウン症児の問題も説明できることが示唆されている（Brown, 2004）[5]。また，自閉症児の中にもSLI児に類似した時制辞の問題をもつサブグループがある可能性が指摘されている（Roberts, Rice, & Tager-Flusberg, 2004）[6]。

このように，時制辞を中心とした文法的形態素の獲得は，障害児と健常児の言語獲得にとって重要な意味をもつと思われる。したがって，言語発達の予測や言語指導の指標を得るためにも，時制辞を中心とした文法的形態素に関する研究は有意義なものであると考えられる。

しかし，日本においては障害児，健常児ともに時制辞を中心とした文法的形態素に視点を当てた研究は少ない。そこで本稿では，まず欧米における文法的形態素の獲得及び障害研究を概観し，次に我が国のダウン症児を対象とした言語研究における今後の課題について述べる。

2．欧米における文法的形態素の獲得及び障害研究

ダウン症児などの知的障害児の言語に関する基本的な論点の一つに，知的障害者と健常者の間に言語の質的な差異があるのかどうかという点がある（Beveridge, Leudar, & Conti-Ramsden, 1989）[7]。Lenneberg（1967）[8]は，ダウン症児の言語は本質的には健常児における言語の獲得と異なっていないとしている。また，伊藤（1998）[9]は，知的障害児・者の言語獲得に関する従来の知見を概観すると，知的障害児の初期の言語獲得は，健常児に比して遅れるということを除けば言語獲得段階や統語的複雑さの順序において健常児と類似していると述べている。一方，知的障害児は同一のMA（精神年齢）またはMLU（平均発話長）の健常児に比して，機能語の理解や性・数の一致など，形態的，統語的により複雑な側面において著しく低い成績を示すとしている。このように，知的障害児の言語の獲得は基本的には健常児の獲得過程を遅れてたどるとされているが，形態論，統語論的な側面を中心に単なる遅れでは説明できない面がある可能性も指摘されている。

知的障害児の中でも特にダウン症児は，意味論や語用論，語彙的な側面に比して形態統語論的な側面が障害を受けているとされている（Stathopoulou et al., 2010）[1]。また，健常児の言語獲得段階についての仮説の一つにおいても，言語獲得のためには時制辞などの機能範疇の発現が重要な役割を果たしているといわれている

＊　東京学芸大学大学院教育学研究科
＊＊　東京学芸大学（184-8501　小金井市貫井北町 4-1-1）

（Radford, 1990）[2]。そこで以下ではダウン症児を対象とした文法的形態素の研究について紹介する。

Rutter and Buckley（1994）[10]は14名のダウン症児を対象に縦断研究を行い，14種類の文法的形態素の獲得年齢を健常児と比較した。その結果，健常児において初期に獲得される形態素は，ダウン症児においても時期は遅いものの比較的初期に獲得されることが明らかになった。しかし，ダウン症児では獲得年齢のばらつきが大きく，時制に関係する三人称単数形の-sは観察期間中には14名とも獲得しなかった。同様にダウン症児の自然発話を分析したBrown（2004）[5]では，ダウン症児は健常児よりも時制辞を有意に多く省略したが，複数形の-sなど時制以外の文法的形態素の省略には有意差がなかった。これら2つの研究結果からは，ダウン症児は時制に選択的な障害がある可能性が示唆される。

一方，Eadie, Fey, Douglas, and Parsons（2002）[11]はMLUを揃えたダウン症児とSLI児，健常児の発話を分析した。その結果，ダウン症児とSLI児ともに時制の屈折と時制以外の形態素において健常児と有意な差があることが明らかになった。Ring and Clahsen（2005）[12]はMAが同一のダウン症児と健常児を対象に産出課題を行った結果，時制と時制以外の形態素の両者で健常児より有意に成績が低かったとしている。過去形の規則形と不規則形の正答率にも有意差は認められなかった。したがってこれらの研究からは，ダウン症児は時制辞のみに問題をもつという結果は得られていない。

Laws and Bishop（2003）[13]は非言語性MA（nonverbal mental age）を揃えて，ダウン症児とSLI児，健常児に過去形などの産出課題を実施した。その結果，ダウン症児は過去形の不規則形の正答率には健常児と有意差がなかったが，規則形の産出には弱さがあったとしている。また，Stathopoulou et al.（2010）[1]はギリシャ語を用いて，同一のMAのダウン症児と健常児に対して過去形の正誤判断課題を行った。その結果，実在語では両群に有意差は認められなかったが，非語の過去形の正誤判断においては有意差があったと述べている。このように，ダウン症児は時制辞の中でも特定の側面に問題がみられるという可能性も示唆されている。

また，SLI児がしばしば時制辞を省略するという問題に対する説明としてEOI（Extended Optional Infinitive）仮説が提案されている（Rice et al., 1995）[4]。これはOI（Optional Infinitive）段階の考え方を基にした仮説である。OI段階とは，英語などの言語において，幼児が過去形の形態素を産出するなど動詞を屈折させることができるようになっても，しばしば屈折を省略する段階のことである。このように時制辞が付加される時とされない時があることを，言語学の領域では時制辞の付加に随意性がある（optional）という。EOI仮説は，SLI児が健常幼児のOI段階を長期間にわたって示しているという仮説である。ダウン症児の時制辞の問題もこの仮説によって説明できるとする研究もある（Brown, 2004）[5]。しかし，ダウン症児はEOI仮説で問題とされている時制辞だけでなく，より広い範囲の文法的形態素に問題をもつという指摘もある（Ring et al., 2005）[12]。

３．日本におけるダウン症児を対象とした言語研究の今後の課題

前節では欧米における文法的形態素の獲得研究について述べた。近年，日本においても健常幼児を対象として時制辞に視点を当てた研究が行われ始めている。

Sano（1999）[14]は，OI段階が日本語にも当てはまるかどうかを検討し，日本語では随意性は子音動詞の否定形にみられるとした。子音動詞は否定を表す「ない」が付加される際に語幹に変化が生じるが，幼児では例えば「入るない」などと語幹を屈折させずに産出することがある。この現象が随意的に起こるとされているため，日本語においては子音動詞の否定形に随意性がある，すなわち「入らない」と「入るない」という形が共存すると述べられている。

Murasugi and Fuji（2009）[15]はRI（Root Infinitive）段階に似た段階は日本語にも存在するとしている。RIとは，先に述べたように英語などにおいて2歳前後の幼児が産出する，動詞の屈折していない形態のことを指し，特徴の一つとして随意性があることが指摘されている。Murasugi et al.（2009）[15]は子どもが成人と同様の文法を使うようになるまでに3つの段階があることを示した。まず“RI analogue stage”という段階が1歳6ヵ月から1歳11ヵ月までを目安に存在する。この段階では動詞と屈折（Inflection）は結合（merge）しておらず，動詞のタ形のみが産出され，タ形が過去以外の意味でも使用される。次に“Post RI analogue stage”として，1歳11ヵ月から2歳1ヵ月を目安とする段階がある。この段階では動詞のル形も正しく産出することができ，アスペクト辞や否定辞も産出される。しかし，動詞の主要部移動が1段階しか行われないため，アスペクト辞の形態は「ている」ではなく「てる」になり，否定辞が付加された動詞の形態は例えば「歌わない」ではなく「歌うない」といった形に

なる。その後の“Onset of Finite Verb Stage”では動詞と屈折は結合し，「―ている」や正しい否定形が産出できるようになる。このように，Murasugi et al.（2009）[15]は時制辞を手がかりとして幼児の統語発達についての3つの段階を提案している。

團迫（2010）[16]も時制辞に着目し，「日本語の主格は時制辞Tに認可される」という言語理論上の仮説をもとに3段階説を提案している。この仮説は，日本語は主格標示（格助詞「が」の使用）のためには時制辞を必要とするというものである。したがって，主格標示された名詞句（「が」を含む句）は獲得過程において時制辞よりも早く出現することはないと予測される。この予測を基に示された3つの段階とは以下の通りである。Stage Ⅰは時制辞が用いられるようになるが，ガ格は形態的には現れない段階である。次のStage Ⅱは，「―てる」などの屈折形式が豊かになりガ格が現れるが，主題の意味役割と解釈される名詞句に対してのみ標示される段階であるとされている。三原（1994）[17]によると，意味役割（θ役割）とは文中で名詞句が担う意味機能のことであり，意味役割の一つである主題とは，移動や状態変化を受ける人や物，場所や状態について言及されている人や物などを示す。例えば「太郎が学校にいる」の「太郎が」は主題である。最後のStage Ⅲは，成人と同様に意味役割の種類に関係なく主格標示される段階である。主題以外の意味役割には，意思をもって動作を行う主体を表す動作主などがあり，意味役割が動作主である名詞句を含む「サンタがくる」などの発話も観察されるようになると述べられている。

このように，日本においても健常幼児の時制辞の獲得を検討した研究はいくつか存在する。一方，ダウン症児の文法的形態素を対象とする研究では，助詞や助動詞に関する研究はあるものの（利倉・黒田，1989; 綿巻，1999; 斉藤，2002; 2003）[18-21]，時制辞に着目した研究はほとんど行われていない。これまでに挙げてきた国内外の研究では，時制辞に視点を当てることでEOI仮説や日本語の主格標示に関する仮説などの言語理論と関連した知見が得られている。言語理論を踏まえた研究は言語獲得段階の予測や言語指導の指標を得るために有用であると思われる。したがって確かな知見や理論に基づいた言語獲得の予測や根拠のある指導を行うためにも，時制辞を中心とした文法的形態素に着目したさらなる研究が必要であろう。

そこで今後のダウン症児の言語研究に関して，以下にいくつかの具体的な課題を挙げてみたい。

①動詞のル形とタ形，格助詞「が」に視点を当てた研究

「日本語の主格は時制辞Tによって認可される」という言語理論上の仮説をもとに，主格を表す格助詞「が」と時制辞の出現時期について検討する。日本語においては「る」や「た」などの時制を表す形態素がない動詞は形態的に許されないため，英語のように時制辞の有無を検討するのではなく，ル形とタ形の両者に着目することが必要であると思われる。

②タ形が動詞のディフォールトの形態であるという提案の検証

先にも述べたように，日本語においては時制辞などを付加しない形態（非定形）が許されないため，非定形に対応する形態をどのように捉えるかが問題となる。Murasugi et al.（2009）[15]は日本語ではタ形が動詞のディフォールトの形態，すなわち非定形であると指摘した。それを示すものとして英語圏の幼児が非定形を産出する時期があるように，日本語における幼児ではタ形のみを産出する時期があると述べている。この指摘の妥当性について，さらに多くのデータを用いて検証することも今後の課題であろう。

③主格標示された名詞句の意味役割についての研究

上記に示した團迫（2010）[16]では，幼児の言語獲得は，格助詞「が」を含む文において主題の意味役割を示す名詞句のみが産出される段階（Stage Ⅱ）から，意味役割に関係なく格助詞「が」を含む名詞句が産出される段階（Stage Ⅲ）へ移行するとされている。この仮説の妥当性の検討も今後の研究課題となる視点であると思われる。

このように，理論を根拠とする文法的形態素の日本語を対象とした研究課題は上記の3つを含めて多数存在すると思われる。これらの知見に関するダウン症児の言語データを利用した検討を積み重ねることにより，ダウン症児の言語獲得に関する指標や根拠のある指導の基盤を構築することが可能になると思われる。

しかし，言語発達初期である二語発話期前後の子どもの研究には常に方法論的な問題が付随する。Rutter et al.（1994）[10]も，限られた場面で発話を収集することによって産出する語彙が制限されたり，その発話サンプルからは「獲得していない」とは断定しにくいという欠点があることを指摘している。また，例えばダウン症児は発話の不明瞭さをもつと述べている。そのため，収集する発話数や場面数を増やしたり，複数で

判断したりすることによってデータの信頼度を上げる必要があると思われる。二語発話期前後の子どもを対象として実験的に検討を行うことには困難な面もあるが，この時期は言語獲得の鍵となる重要な時期である。場面や刺激材料を統制しながら発話を収集する方法を開発することなどが求められるであろう。

４．おわりに

本稿は時制を中心とした文法的形態素に関する従来の研究を概観し，我が国におけるダウン症児の文法的形態素に関する今後の研究課題について論じたものである。初めに，欧米における健常児とダウン症児を対象とした時制辞の獲得研究を概観した。健常児の時制辞に関する獲得研究は重要であることを示し，ダウン症児は時制辞に問題をもつ可能性を指摘した。次に，日本の健常児を対象とした時制辞に関する研究を紹介し，我が国のダウン症児の言語に関する今後の研究課題として３つを提案した。最後に，二語発話期前後の子どもの言語獲得に関する研究方法の開発が必要であることを述べた。

文献

1） Stathopoulou, M. & Clahsen, H.: The perfective past tense in Greek adolescents with Down syndrome. Clinical Linguistics & Phonetics, 24（11）, 870-882, 2010

2） Radford, A.: Syntactic theory and the acquisition of English syntax. Basil Blackwell, Oxford and Cambridge, MA, 1990

3） Wexler, K.: Optional infinitives, head movement and the economy of derivations. In Lightfoot, D. & Hornstein, N.（Eds.）, Verb movement, Cambridge University Press, 1994

4） Rice, M.L., Wexler, K., & Cleave, P.L.: Specific language impairment as a period of Extended Optional Infinitive. Journal of Speech and Hearing Research, 38, 850-863, 1995

5） Brown, M.: Optional infinitives in Down syndrome. Massachusetts Institute of Technology, Retrieved from http://www.riverbendds.org/index.htm?page=brown.html/, 2004

6） Roberts, J.A., Rice, M.L., & Tager-Flusberg, H.: Tense marking in children with autism. Applied Psycholinguistics, 25, 429-448, 2004

7） Beveridge, M., Leudar, I., & Conti-Ramsden, G.: Language and communication in mentally handicapped people. Capman and Hall, London and New York, 1989. 今野和夫・清水貞夫監訳，知的障害者の言語とコミュニケーション（上）．学苑社，東京，1994

8） Lenneberg, E.H.: Biological foundation of language. Wiley, New York, 1967. 佐藤方哉・神尾昭雄訳，言語の生物学的基礎．大修館書店，東京，1974

9） 伊藤友彦: 知的障害児の言語―知識・獲得―．堅田明義・梅谷忠勇編著，知的障害児の発達と認知・行動．田研出版，東京，1998

10） Rutter, T. & Buckley, S.: The acquisition of grammatical morphemes in children with Down’s syndrome. Down Syndrome Research and Practice, 2（2）, 76-82, 1994

11） Eadie, P.A., Fey, M. E., Douglas, J.M., & Parsons, C. L.: Profiles of grammatical morphology and sentence imitation in children with specific language impairment and Down syndrome. Journal of Speech, Language, and Hearing Research, 45, 720-732, 2002

12） Ring, M. & Clahsen, H.: Morphosyntax in Down’s syndrome: Is the Extended Optional Infinitive hypothesis an option?. Stem-, Spraak-en Taalpathologie, 13（1）, 3-13, 2005

13） Laws, G. & Bishop, D. V. M.: A comparison of language abilities in adolescents with Down syndrome and children with specific language impairment. Journal of Speech, Language, and Hearing Research, 46, 1324-1339, 2003

14） Sano, T.: Verbal inflection in the acquisition of Japanese. COE International Workshop, Retrieved from http://coe-sun.kuis.ac.jp/public/paper/outside/sano2.pdf, 1999

15） Murasugi, K. & Fuji, C.: Root Infinitive in Japanese and the late acquisition of head-movement. Boston University Conference on Language Development 33 Proceeding Online supplement, 33, 1-12, 2009

16） 團迫雅彦：獲得初期段階における未指定の機能範疇―日本語の時制辞と主格の獲得から―．九州大学言語学論集，31，145-157，2010

17） 三原健一：日本語の統語構造―生成文法理論とその応用．松柏社，東京，1994

18） 利倉　章・黒田吉孝：知的発達遅滞児の助詞習得に関する研究―ダウン症Ｍ児の事例研究を中心に―．滋賀大学教育学部紀要　人文科学・社会科学・教育科学，39，59-74，1989

19） 綿巻　徹；ダウン症児の言語発達における共通性と個人差．風間書房，東京，1999

20） 斉藤佐和子：ダウン症児者の構文能力．音声言語医学，43，196-199，2002

21） 斉藤佐和子：ダウン症児者の構文表出能力―構文検査（斉藤私案）と状況絵を用いて．コミュニケーション障害学，20（1），8-15，2003

我が国のダウン症児の言語研究における今後の課題

―― 文法的形態素に視点を当てた研究の必要性 ――

Issues in Language Research on Down Syndrome in Japan:

Need for Studies of Grammatical Morphemes

安　宅　涼　香*・伊　藤　友　彦**

Suzuka ATAKE and Tomohiko ITO

特別支援科学講座

Abstract

The purpose of this study was to review research on grammatical morphemes focusing on tense morphemes, and to discuss issues for further research on grammatical morphemes in Japanese children with Down syndrome. First, we reviewed the literature on tense morphemes in typically developing children and those with Down syndrome in the United States and Europe. We then realized that the studies of tense morphemes were important for typically developing children, and that children with Down syndrome had problems with tense morphemes. Second, we reviewed the research on tense morphemes of typically developing children in Japan. Then we proposed the following three issues for further research: 1) relationships between tense morphemes such as "ru" and "ta" and case markers "ga", 2) whether or not "ta" was a default full verbal form in Japanese, and 3) the semantic roles of nouns marked by the case-marker "ga" when they began to be used. Finally, we discussed the problems of research method of language acquisition in children at around the two-word stage.

Key words: Down syndrome, language acquisition, grammatical morphemes, tense morphemes

Department of Children with Disabilities, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨:　本稿は従来の時制辞を中心とした文法的形態素に関する研究を概観し，我が国におけるダウン症児の文法的形態素に関する研究の今後の課題について論じたものである。初めに，欧米における健常児とダウン症児を対象とした時制辞の獲得研究を概観した。健常児における時制辞の獲得研究が重要であることと，ダウン症児が時制辞に問題をもつことを示した。次に，日本の健常児を対象とした時制辞に関する研究を紹介し，我が国における今後の研究課題として３つを提案した。1）動詞のル形・タ形と格助詞「が」との関係，2）タ形が日本語の動詞のディフォールトの形態であるかどうか，3）格助詞「が」の出現開始期における主格標示された名詞句の意味役割。最後に，二語発話期前後の子どもの言語獲得に関する研究方法の問題点について述べた。

キーワード: ダウン症，言語獲得，文法的形態素，時制辞

*　Graduate School of Education for Children with Disabilities, Tokyo Gakugei University
**　Tokyo Gakugei University (4−1−1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184−8501, Japan)